

調 査 表

調 査 時	附 着 重 量		種 苗 数		個 体 測 定 (種 苗)		
	総 重 量	平 均 重 量	総 数	附 着 器 種 苗 数	殻 長	殻 厚	重 量
1950年7月28日	2278g	506g	1004個	123個	21.5mm	1.4mm	1g
6月7日	2900	680	1489	133	294	1.9 ⁶	109
7月18日	5900	1405	1115	165	424	2.8 ⁰	425
8月24日	4610	1074	991	136	430	2.6 ⁷	546
9月15日	7565	1800	918	218	450	2.5 ⁷	700
10月31日	7615	1818	838	187	442	2.7 ⁵	776
51年5月6日	4185	2320	208	115	541	3.8 ²	1770

※ 個体測定標中の重量は放養当時の種苗1ヶ1gと仮定し、従つて附着器重量(種苗重量を差引いた数値)は506g - 223g = 283gとし、6月以降の個体重量は附着器重量より283gを差引いた残額を種苗数で除した数値である。この場合鮎介の附着器についたものも含まれることによるから、実際はこの数値より低いことになる。

2 シレナシヅメ (*Osolisa luehiana* Pilsbry) 移殖地調査

調査員 入高喜八郎 宮城正博

趣 旨

シレナシヅメは真珠殻原料として日本に足跡が見出されたので今後琉球水産物の重要輸出品として大規模に系統的に計画生産を行う必要がある。

現在のところ生産地は西表であるが琉球本島にも移殖すべく、その適地を調査して居た。また東村俊佐次在任の仲本真正氏が未所したので、話を聞いたところが、俊佐次川は川巾が広く、マングローブが密生し、然も戦前シレナシヅメが生棲していたとの事だったので、有利な移殖地ではないかと思考し、調査した。

期 間 1950年7月3日～同月4日 2日間

調 査 方 法

俊佐次川に部落の手前の俊佐次橋より約500mおきに5つの設点を定めて、その底質、気温、水温、比重、その他を調査した。(才1図参照)

調査結果

設点	底質	気温	水温	比重	備考
1	砂利が表面を覆いその下は細砂	32.0	28.8	1.010	川巾50米、西方川堤にマングローブが1米の巾で上流に続く、10~15種のゴキブリが50尾程かりけられた。
2	細砂(径1mm)	32.0	28.5	1.010	川巾40米、干渉時には約10米巾の浅水があるのみ。干渉時の水深は約20cm、ホソスジイナミガイ数個採集した。
3	赤褐色粘土(10cm)の下は黒褐色細砂土	32.0	29.2	1.013	50米×50米のマングローブ林が2ヶ所あり、干渉時はタイドプール状になる。トビハゼ、フグ類が見受けられた。
4	才3設点に同じ	32.0	36.0	1.013	以前シレンナンジミを採集したことがあるという地点で才3設点のマングローブ林に含まれる。これより先はマングローブがすげらばに生えて居た。本流の水深は干渉時で約80cm、岸土手にマングローブがあるのみ。
5	細砂に赤色粘土及び砂利	32.3	30.0	1.008	
6	岩のかげら(3cm)に砂利及び細砂	32.1	29.5	0.923	川巾5米、マングローブは全然なくトビハゼ類も見られなかつた。干渉時にも海水はこない。
平均		32.1	30.0	1.000	

論

慶佐次川は有銘の西方に源を発し、約8kmの長さがあり、河口より約3kmまでは平均川巾40mである。マングローブは河口より1km上流の慶佐次橋より生じ、特に才3設点より才4設点迄に約5000本位のマングローブ林が2ヶ所ある。この区間の比重は干渉時1.01台であつた。

橋より2km上流は川巾が急に狭くなつて約5m位にありマングローブは全然なく、干渉時の比重は0ポイント以下であり、干渉時でも海水は上つて来ない。

さて、底質を見るに、河口附近より才2設点迄は砂利に細砂であり、才5設点より才6設点迄は赤かつ色粘土に黒かつ色細砂土であり、それより上流は2~3cm四方の岩のかげら及び砂利である。

従つて本川におけるシレンナンジミ繁殖地は才3設点より才4設点に限られる。

所感

前記の通り慶佐次川にはマングローブのあることと、川巾が広く、それに反し水量がそれほど少ないこと、土質、水温、比重がやゝ名蔵川と似ていることから適地であるとの見通しをつけた。但し厳密にいうと次の点が気懸りになる。即ち西表又は名蔵の土質は腐泥土と細砂が主であるのに対し、慶佐次川は赤かつ色粘土である。一般に貝類にとっては赤かつ色粘土は余り好ましいものではないといわれているのでその点が一つ。もう一つは此の川でナギ、ボク等を捕る為よく青酸カリ等の毒薬物が使われていることである。前者は人力では如何ともし難く、又或いは赤かつ色粘土が好ましい結果を示すかも知れないので、はつきり断定は出来ない。しかし後者は絶対にいけない。それで村当局及び部落民に今後絶対に薬品、

イナマイト等を使用しないで欲しいと強く要望した。

慶 佐 次 川

